
異世界と妖精

ししゃも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界と妖精

【Nコード】

N8976R

【作者名】

ししゃも

【あらすじ】

地味で孤独な人生を送ってきた四方英輝はひょんなことから異世界<レンドブラン>に迷い込む。

<レンドブラン>にくる際に身につけた特殊能力と偶然出会った妖精<リンカ>の力を借りながら英輝は異世界を旅する。

最初から少しずつ改訂中。

旅立ちウサギ(改)

その日俺はいつものバイトを終えいつものように帰宅し、シャワーを浴び、夕飯を食べ、少しパソコンをいじって寝た。

いつもど通りの普通の一日が終了、のはずだったのだが。

しかしその日一番のイベントというか、俺の人生のメインイベントは寝た後の夢の中に待っていた。

それは不思議な夢だった。

気づくと俺の目の前に一匹のウサギがいる。

辺りは薄暗く目の前にいるウサギ以外はどうなっているのか分からない。

小学校などで飼っているようなよくいるウサギを、二周りくらい大きくしたような大きなそのウサギは赤くつぶらな瞳をこちらに向けて鼻をヒクヒクと動かしている。

「ようこそ、旅人」

突然ウサギがしゃべりだした。

「ここは世界をつなぐ＜街道＞旅人が迷わぬように道案内をするのが僕の役目」

「君の望む世界へ案内するよ」

えええ、なにこれ。なんかウサギがめちゃくちゃ流暢にしゃべっ

てるんですけど。

「君が行きたい世界はどんな世界だい？」

「剣と魔法の世界機械が支配する世界超能力が普及した世界久しぶりの旅人だどんな世界でも案内するよちなみに僕のおすすめは<レンドブラン>だね剣と魔法の典型的なファンタジー世界なんだけど君がいた世界とは全然違う世界だから楽しいと思うようんやっぱり<レンドブラン>にしときなよ絶対楽しいから後悔させないよいいよねいいよねレンドブランで」

いや、息継ぎ。どこで息継ぎしてんだよ。

しゃべっている間も鼻をヒクヒクと動かし見た目は大変可愛らしいのだが……。

正直ウサギのしゃべりの達者ぶりが気になって内容に関してはまったく頭に入ってこないのだが、ウサギの妙な迫力に押されてなんとなくうなずいてしまう。

俺がうなずいたのを見たウサギは軽く飛び跳ねると

「よし、じゃあ決まり早速<レンドブラン>に案内するよ」

そう言うとうサギは何かぶつぶつとつぶやき始めた。

声が小さいため何を言っているのかは分からないのだがウサギの声に呼応するように辺りが次第に明るくなってくる。

明るくなってきた辺りを見回すがそこは見渡す限りの白。おそらく室内だとは思うのだが、一面白に埋め尽くされたその場所が広いのか狭いのかも分からない。

「よし、っじゃあ行くよ」

つぶやくのをやめたウサギがそう言うともた軽く跳ねる。

「世界をつなぐ道は確かに繋がり、旅人は今新たなる世界へと旅立つ」

「地球の意味たるガイア、レンドブランの意味たるネルキアは旅人に祝福を授けん」

ウサギの言葉に反応するように光が白い部屋を埋めていく。

「じゃあ、行っておいで旅人。君の人生が幸多たひからんことを《旅人に幸あれ》」

その言葉を最後に光は更に強さを増し俺は意識が薄れていくのを感じていた。

旅立ちウサギ（改）（後書き）

書き直してみたものの、うーん難しい。

とび蹴り妖精（前書き）

リンカとの出会いです。

誤字脱字、文章の変なところあるかもしれませんがすみません。

とび蹴り妖精

次に俺が目を覚ますと目の前に妖精がいた。

そう妖精。

妖精の用に可愛い女の子とかいう比喩的表現ではなくガチのやつが。

体長は20センチくらいで背中にはトンボに似た羽が生えている。顔はよく見えないが女の子のようだ。

なぜ顔が見えないのかというとその妖精が俺の顔に張り付いていたからである。

いや、張り付いていたというのが適切な表現かわからないがとにかくその妖精は手を広げ俺の顔をひしっとつかんでいる。

「あ、おきた」

妖精はそう言う俺の顔から離れていった。

改めて妖精の顔を見ると思ったより可愛い顔をしている。

可愛いのだがその表情は想像とだいぶ違う、なんと言うかやる気が感じられないのだ。

目は半開きで眠そうだし被っている帽子もずれていて今にも落ちそうになっている。

「……………」

「おきてるっしょ?」

「：ああ、一応」

「OK，OK」

俺の返事を聞くと妖精は再び俺の顔にしがみつきの来る。
おどろいて手で防ぐと妖精はぐむーという変なうめき声をあげた。

「なんで邪魔するの？」

「いやいやいや、なにしてるの、てかここどこ、つか妖精、妖精っ
ているの？」

「妖精はいるし、ここは妖精の森、OK？」

そういつて妖精はまた近づいてくる

「いやいやいや、なにしてるか答えてないし」

「あー、なにしてるかっていうと………暇つぶし？」

「なぜ疑問系」

「まあ、なんとなく」

「答えになってないんだが」

「うーん、まあ簡単に言うて暇でぶらぶらしてたら人間が倒れてい
て人間とか見るの初めてだったからいろいろ弄って遊んでたら目を
覚ましたってところ」

OK？と聞くと妖精は俺にしがみつくのをあきらめたのか少し離
れた場所でふわふわと飛んでいる。

改めて周りを見回すと確かに森の中のようなようだ。

しかし妖精の森？

なにのその昔のRPGに出てきそうな名前の森は。

「えーっともしかしてここって異世界？」

「そうだよ」

だれにともなく言った疑問に妖精が即答してくれた。

「まあ、あんたがどこの世界から来たかは知らないけどここはレンドブランって世界」

レンドブラン………そういえば夢の中でウサギが何か言っていた気がする。

てかあれ夢じゃなかったのか？

「そうかい、異世界かい」

「こそ、異世界、異世界」

……………寝よう。

「とうー」

「イタっ、とび蹴りすんなよ！」

「現実逃避すんな」

「いやいや、あれでしょこれ夢落ちでしょ、もっかい寝れば普通に戻るやつでしょ？」

「ねおち？よく分かんないけどこれは現実、蹴られて痛かったっしょ」

確かにとび蹴りは痛かった。

しかしこれが現実とかまじかい。

確かに今の生活には飽きていたし、なんか面白いこと起きないか

なあと思っっていたけども、これは面白すぎてちよつとひくわー。

「あきらめて現実受け入れたほうがいいよー、どうせ戻れないし」

いや、今この妖精さんなんかさらつと重要なこといいませんか？

「戻れない？」

「そそ、あんたんとこの世界はどうか知らないけど、こっちの世界じゃ異世界から人が来るのってそんなに珍しいことじゃないんだよねー」

「んで異世界から来た人間は一回きたらきっぱなしで帰れないのも常識」

……………寝よう

「てやー」

「おわ、目はやめて目は」

「往生際が悪いなー、全部現実だから受け入れちゃえば楽になるよー」

そうは言うがいきなり異世界にきました、でも一生帰れませんとか言われて受け入れろって言われてもなあ。

……………はあ、まあここで悩んでも仕方ないか。

「よしっ、決めた悩むのは後回しにしてこれからのこと考えないと

な」

「そそ、これからこれから」

とここまで話してまだ妖精の名前を聞いていないことに気づいた。
いつまでも妖精じゃまずいよなあ。

「そういえばまだ自己紹介してなかったな俺は四方英輝」

「あたしはリンカ」

「リンカかよろしく」

「はいはい、よろしくー」

「で、リンカこれからどうしたらいいと思う？」

「どうって、好きに生きたら？」

「いや、好きにって言っても俺この世界のことぜんぜん知らないし」

そう、リンカの言うとおり帰れないのだとしたらこの世界で生きていけないといけない。

それならばこの世界のことを知っていけないといけない。

「えー、めんどくさいなあ」

「まあまあ、そう言わずに可愛いリンカさんこの世界のこと教えてくださいよー」

ここでリンカに見捨てられたらどうしようもないので必死にゴマをする。

「キモっ、てかあたし説明とか苦手なんだよねー」

「あ、そうだあたしの変わりに説明好きのやつんとこ連れて行くわ」

「説明好き、同じ妖精？」

「うんまあここ妖精しかないし」

「そっか、それじゃあ綺麗なリンカさん案内おねがいします」

精一杯の可愛さでお願いする。

「キモっ、……………まあいいや付いてきて」
「は〜い」

どうやら妖精には俺の可愛さが理解できないらしい。

そんなこんなで俺はふわふわと飛んでいくリンカの後について歩き出した。

説明する人（前書き）

文章書くのはやっぱ難しいですねー。

後からいろいろ手直しするかもしれませんがとりあえず
どうぞ。

説明する人

リンカとの出会いから数分後、ふわふわと飛んでいたリンカの後をついて歩いていくと何もない場所で唐突にリンカが止まった。

「ついたわよー」

そう言ってリンカが振り返る。

「着いたってだれもないけど？」

そこは俺が目覚めた場所とさして変わらないように見える森の中、リンカ以外に妖精がいる気配もない。

「あー、そか、視えないのかーめんどくさいなー、てかどうせ気づいてるんだろうから自分から姿見せろっての」

なにやらぶつぶつとつぶやくとリンカは俺の顔に近づいてくるといきなり耳を捻る。

「いたっ、いきなり何？」

痛みはたいしたことなのだがいきなりの行動に驚いてリンカのほうを向く。まあリンカは耳にしがみついているので実際には見えな
いのだが。

「いいから、正面を見る」

正面？ 何がしたいのかよく分からないのだが言われるままに正

面を向く。

「向いたけど？」

「何が見える？」

「でっかい木」

「っち！にぶいなー」

うわ、今舌打ちしましたよこの妖精さん。いきなり人にとび蹴りくらわしたり、舌打ちしたりと一般的な妖精のイメージをどんどんこわしてくれますよこの妖精さん。

「もっとよく見る！」

「よくっていつでもなあ」

リンカに言われて正面にある木の辺りをじっと見つめてみる。

あんま視力よくないんだよねーなどと思いながら見つめていると視界の端で何かが動いた。その動きにつられて視線で追う、しかし何もない。

なんだったんだと思いながら正面に意識を戻すと……………。

そこにはさっきまでいなかったはずの女性が立っていた。

「うおっ、え？ ダレ？ てかどこにいた？ え、マジック？ ミスターマリック？」

「最初から居たし、目の前に」

「いやいやいや、いなかったでしょ？ あ、魔法？ 魔法的なやつ？」

驚きすぎて変なテンションになっている俺にリンカが深々とため息をついて答える。

「あー、そうそう魔法魔法すごいよねー」

「気持ちこもってねー」

「うっさい、見えたんだからいいでしょ」

リンカとそんな無駄なやり取りをしてる間も目の前の女性は黙ってニコニコとこちらを見ている。

しかし、改めて見るとめっちゃくちゃ美人さんじゃありません？

長く伸びた髪の色が青いのがなかなかにファンタジーだけど、雪のようにという形容詞がぴったりとくる白い肌と蒼い瞳に意外なほど馴染んでいて、なんというか……圧倒される。

「えーと、それでリンカさんこちらの女性は？」

「説明する人」

「いや、名前とか……」

「自分で聞け」

心底めんどくさそうにそう言うところリンカは役目は終わったとばかりに飛んでいってしまった。

「えー、紹介くらいは……っていないし！」

リンカがいなくなってしまったのでしかたなく美人さんの方に向き直る。

……………困った。

ただでさえ女性と二人きりという状況で緊張するのに、相手は今まで見たこともないような美人さんなのである。こういうときは何を話せばいいんだろうか、やっぱり名前を聞いて……いや自己紹

介が先か？

「四方英輝さんですね？」

どう話しかけるか悩んでいると突然向こうから話かけてきた。

「あ、ふあい！」

ちくしょう噛んだ！

「私はここの妖精たちの代表を務めているニアと申します」

「あ、どうもです」

緊張しすぎてなんとも間の抜けた言葉しか返せない。

「こちらの世界の情報をお求めですね？」

「はい、っていうかなんで俺の名前知ってるんですか？」

こっちの世界に来てからまだリンカにしか自己紹介していないはずだし、自己紹介した後もリンカが俺の名前をフルネームで呼んだことはない。

「リンカから聞きました」

「え、でもリンカと話なんかしてましたっけ？」

「直接会って話はしていませんが妖精同士ですと念話で話せますので」

念話……………まあ、異世界だし何でもありか。

「それで英輝さんは現在の自分の状況をどの程度把握してらっしゃいますか？」

「どの程度といっても、なぜか異世界に来てしまっていて、その異世界には妖精さんがいるというぐらいしか……………」

「そうですか、それでは最初から説明させていただきますね」

「はい、お願いします」

「まず最初にリンカから聞いたかも知れませんが、この世界＜レンドブラン＞では異世界から人がやってくることで自体それほど珍しいことではありません」

「私も詳しいことは分かりませんが大体1年に10人ほどのペースで異世界から人がやってくるといわれています」

1年に10人、かなり多いな。

「しかし、それだけの人がこの世界に来ていても元の世界に帰れて人は1人もいません」

へー、1人もいないのかあ……………まじで？

「あーそれってまじで、1人もいないんですか？」

「はい、1人も」

にっこりと笑ってそうおっしゃる

「あー、それは簡単に言いますとおまえはもう元の世界に戻れないぞと？」

「はい」

まじかー、いやリンカも言ってたからそんな簡単に戻れますよーとかならないとは思ってたけども戻れないのかー。

……………でもまあよくよく考えてみると別にいいか。正直元の世界にたいした未練はない。

両親は2人とも他界しているし、彼女もいない、友達もいないことはないが親友と呼べるような存在はいないし、俺がいなくなったところでたいして心配もされないんじゃないだろうか……………別に寂しくなんかないから！

「大丈夫ですか？ なにかどんよりした空気がただよってますが」「ぜんっぜん大丈夫です！ 人間はみんな1人です！」「そうですねー」

そう人間はみんな1人別に友達や彼女がいなくても大丈夫！生きていける！

「説明、つづけますねー」

「あ、どうぞどうぞ」

「異世界と一口にいてもいろいろな世界がありますので＜レンドブラン＞にも多種多様な世界から様々な人が来られます」

「いろいろってそんなに異世界があるんですか？」

「ええ、確か現在確認されているだけでも100以上の世界があるはずです」

100以上……。多い……。のか？ 世界の数なんてよく分からないしなあ。

「そんな多種多様な異世界からの訪問者の方たちには一つだけ共通点があります」

「共通点？」

「はい、＜レンドブラン＞に来られる方たちはどんな人でも能力を身に着けてくるのです」

「能力？」

「そう能力です、それは元いた世界で身に着けていたものではなく

こちらに来る際に身に着けたと思われる特殊能力です」

「その能力を<レンドブラン>ではギフトと呼んでいます」

「ギフト……」

「はい、このギフトは人により様々なものがあります。身体能力が著しく上がったたり、炎を操れるようになったりなどです」

「ということは俺も？」

「はい、何らかのギフトを身に着けてらっしゃると思われます」

いやー、特殊能力ですか。　すごくない？

「その人がどんなギフトを持っているのかは魔力を持った者なら比較的簡単に調べることが出来ますが、調べてみますか？」

「お願いします」

「はい、では手を出してください」

言われるままに右手をニアさんの前に差し出すとニアさんは俺の手を取り、目をつぶって何かつぶやいている。

しかし特殊能力かあ。どんなんだろ、やっぱ異世界ものだとよくある身体能力が上がったりとかかなー、でも魔法とかもつかってみたいよなー。

「終わりました」

そう言うとニアさんが目を開けた。

「どんな能力なんですか？」

「それが……よく分からないんです」

「え、分からない？」

「はい、かなり大きな力を感じるのですが能力の詳細が見えません。私も今まで何人かの異世界の方にお会いしてきましたがこんなこ

とは初めてです」

「ただ能力の詳細は分かりませんでした。が英輝さんのギフトの名前だけは浮かんできました」

「名前ですか？」

「はい、ギフトにはそれぞれ固有の名前が付いています。これは後から付けるものではなく能力を調べる際に一緒に浮かんでくるものなんです」

「はあ、それでその名前は？」

「はい、その名前は……………」

ニアさんは少しだけためると俺のギフトの名前を口にした。

「ハーレム王です」

俺がその後10分ほど石になったのは言うまでもない。

旅人に幸あれ

10分間ほど固まった後そのままにいるわけにもいかないので軽く深呼吸をして仕切りなおす。

「……えーと、まあ名前についてはとりあえず置いておくとして、能力の詳細はわからないんですよ？」

「そうですね、私もギフトを持った方に会ったことは何度かありますが、こういった事例は初めてですので……少なくともここでは分かりませんねえ」

「ここでは、ですか？」

「はい、ここではなくどこかの国で専門の方に見て頂ければ分かるかもしれません」

専門？ ギフトについて研究している人でもいるのだろうか。

「専門ていうとギフトについての専門家ってことですか？」

「そうです、ギフトの能力はこの世界でも貴重なものですから、当然各国ではギフトの所有者を集めギフトの研究が行われています」

「国で研究……ギフトの能力ってそんなにすごいものなんですか？」

「私もそれほど詳しいわけではありませんがギフトの能力は人によつて千差万別で、それこそ料理を上手に作れるようになるものから、一国を滅ぼしかねない程攻撃的で凶悪なものまであるらしいですよ」

それほど危険なギフトは滅多に出てこないんですけどねとニアさんはにっこりと笑った。

いやいやいや国を滅ぼすってどんな能力だよ……。

まあ俺の能力は名前からしてそんな危険なものではなさそうだけ

ども、とりあえずこれからどうするにせよ自分のギフトについてくらい把握しておきたいよなあ。

となるととりあえずどこかの国に行かないといけないのかあと思うものの、よく考えたら俺はこの世界の情勢について何も知らない。

「ニアさん」

「はい？」

「とりあえずどこかの国でギフトについて調べてもらおうと思うんですけど、ここから一番近い国ってなんてどこですか？」

「この森から一番近い国ですとミレニア王国ですかねえ」

「ミレニア王国ですか、そこってここからどれくらいで行けます？」

「一番近い町なら歩きでも半日あればいけますけど、ギフトについて調べてもらうのであれば王都まで行かないと調べられませんからねえ、王都までは歩きだと一週間以上かかりますよ？」

一週間か、結構かかるな。まあこの世界がどの程度の文明レベルにあるのか分からないが、バスや電車が走ってるわけでもないだろうし歩きで行くとなるとしかたないかあ。

いやというかそれ以前に歩きで行くにしても道が分からないなあ、それに一週間もかかるとなると食料やら何やらの準備も必要だよなあ。ちなみに当然のことながら突然異世界にやってきた今の俺は無一文である。

とりあえず近くにあるという町までいてみるか、町まで行けば金を稼ぐ手段も見つかるかもしれないし。

「ミレニア王国まで行かれるのであれば王都まで魔法でお送りしましょうか？」

ん、魔法で？

「え、魔法で行けるんですか？」

「はい、元々この森に人間の方が迷い込んでしまった時に使う魔法なんです、ある程度の距離なら一瞬で移動できますよ」

一瞬で？　すごい魔法、そんなこともできるのかあ。

「御迷惑でなければぜひお願いします」

「はい、わかりました。ではでは少し準備しますので少々お待ちくださいね」

ニアさんはそう言うところから取り出した木の枝で地面に何か書き始めた。

魔法で地面に書くものと言えば魔方陣みたいなものだろうか、興味をひかれて何を書いているのか見てみるが見たことも無い文字をものすごい細かい字で書き込んでいる。よくただの木の枝であんな小さい字が書けるなど感心するが、何を書いているのか分からないので見ていて面白いものでもない。

ニアさんは字を書き込むことに集中している、邪魔をしても悪いので少し離れた場所にある切り株ところに行き座って待つことにした。

することも無いのでぼーっとしていると背中の方から声をかけられた。

「あんたミレニア王国に行くの？」

どこと無くだるそうな声ですぐに分かる、毒舌妖精リンカさんの登場である。

「そのつもりだけど、ってかどこ行ってたの？」

「その辺ぶらぶらしてた、それで王都に行くの？」

「行くけど」

「ふ〜ん……………」

質問に答えると何か考え込むように黙るリンカ。

「よし、決めたあたしも行く」

「どこへ？」

「ミレニアの王都」

「なんで？」

「暇だから」

「どうやって？」

「あんたと一緒に魔法で」

いやいやいや、唐突過ぎませんか妖精さん。おじょうさん

「道案内くらいならしてあげるわよ、どうせ向こう行ってもどこに行っているか分かんないっしょ？」

確かに王都に行ってからどうするか考えてなかったけども、さっきまで森の案内やこの世界の説明をあんだけ面倒くさがってたのにこういう風の吹き回しだ。

「それは確かに助かるけど、なんか裏がありそうで怖いんだけども」

「そりゃ裏くらいあるわよ」

「あんの!？」

あっさりぶっちゃけた。

「基本的に妖精って一人じゃ森の外に出られないの。だから外に出ようと思ったら人間とか他の生き物に付いていかないといけないの」

「それは森の掟的なもので？」

「違うもつと根本的な問題。説明めんどいから簡単に言うとなねあたし達妖精はこの森から命をもらってるの、だから森から出ると生きていけない。それでも出て行こうと思うなら他の生き物から命を分けてもらわないといけないの」

森から命を、要するに森から生命維持に必要なエネルギーを摂取してるってことか、森から出るとなるとそれができないから人間から摂取すると。

しかしそれは……………

「なんか寄生虫みたい、ッグワ！」

俺の余計な一言で、妖精さんによるきれいなとび蹴りが顔面に突き刺さる。

「すいませんすいません、鼻は勘弁してください三つ目の穴が開いちゃうんで」

「余計な運動させんなっつーの」

そんな俺とリンカのそんなやり取りをニアさんがにこにこしながら眺めていた。

「あ、もう準備いいんですか？」

「はい、それにしても英輝さんとリンカは仲よしですねえ」

「……仲がよくみえますか？」

「ええ、とっても」

眼科の受診をお勧めします。

「英輝さんの準備がよろしければ早速お送りしますがよろしいですか？」

「あ、はい、っとそういえばリンカも一緒に行くって行ってるんですけどいいんですか？」

「はい、いいですよ」

ニアさんはそういつてあっさり答えるとリンカの方を向いた。

「リンカさんもうとう森をでるんですね、感慨深いです」

そういう割にいつものにこにこ笑顔で表情に変化は無い。

「それではいいですか、先ほど私が書いた魔導字の上に立ってください」

さっき地面に書いていた字は魔導字というらしい。

いつの間にか俺の頭の上に止まっていたリンカと共に字の上に立つ。

「ではいきますねえ、＞旅人は世界を渡る《送還》＜」

ニアさんがそう言って呪文らしきものを唱えると地面に書かれた文字が光りだす。その光はどんどん強くなっていき目の前にいたニアさんの姿も見えなくなる。

「それでは英輝さんリンカさんしばしのお別れです。あなたたちの旅がよい旅になりますように＞旅人に幸あれ＜」

ニアさんの言葉と共に光はいっそう強くなり俺は意識が遠のくのを感じた。

旅人に幸あれ（後書き）

呪文はかなりテキトーです。
おそらく後で直します。

動き出す運命（前書き）

非常に短いです。

動き出す運命

イセハル皇国某所

「リーダー、《情報屋》レールが新たな《王》の来訪を確認しました」

「《王》が来たか。何年ぶりだ？」

「24年前に《狂乱の王》^{バーサーカー}が現れて以来です」

「そうか、一応様子見に誰か行かせるか」

「すでにミヅホが向かいました」

「ミヅホが？ あいつが一番《王》とか興味なさそうなのになー」

「どうやら今回の《王》はミヅホと同じ世界から来たようでして、レールを脅して強引に情報を聞き出して行きました」

「……まったく、あのじゃじゃ馬が」

「まあいい、さて今回の《王》はどんなやつなのかね」

アルカイツク共和国某所

「レオン様《予言師》の予言どおり《王》が現れたようです」

「ふーん、で？」

「すでにアリエッタは動き出したようです。ローダはまだ動いていないようですが、こちらはどいたしましょう？」

「ほっとけ、あの魔女は男好きだから興味があんだろ。魔人^{ねくら}の方は引き籠もってるし出てこねえだろ」

「それでは接触はしなくともよろしいですか？」

「あーいい、ほっとけ《王》ならそのうちいやでも会うことになるだろ」

「しかしいま現れるか、忙しいんだけどねえ。運命ってやつか？」

妖精の森

「……………」

「はい、《王》が現れましたよ」

「……………」

「彼が私たちの求める《王》なのかはまだ分かりません。しかしリ
ンカは彼について行きましたよ」

「……………」

「ええそうですね、いずれにせよすでに《運命》は動きだしまし
た。私たちにできることは見守ることだけでしょう」

?????

「世界《地球》から世界^{リンドブルム}への渡航者を確認」

「渡航者の《王》への性質変化を確認、更なる変化の可能性あり」

「渡航者《四方英輝》の観察の提案あり、承認します」

動き出す運命（後書き）

いづれ全員登場することになる……かどろかは誰にも分かりません。

《王》と《王》の遭遇

結果からいうとニアさんの魔法は成功した。

………成功はしたんだが、送る場所はどうかできなかったんだろうか。

俺が魔法で現れたな場所は王都のと真ん中で中枢と言っていいであろう場所。

まあ、ようするに王城の謁見の間である。

「貴様、何者だ！」

「魔術士か!？」

近衛兵らしき完全武装の騎士たちが槍を突きつけてくるわけですが。

「あ、いや、あの、怪しいものではないです」

我ながらまるで説得力の無いセリフだが、凶器を突きつけられて冷静にしゃべれるほど肝が据わってはいない。

「どうやってここに入った!？」

「この部屋には結界が張られていたはずだ」

え、結界? そんなこと言われても知らんがな、妖精の森にいるニアさんに聞けよ、と言いたいところだが無理だろうしなあ。

いや、ニアさんがダメでも説明できる妖精ひとがいるじゃないか!

「リンカさんリンカさん、出番ですよー。ヘルプミー」

そう呼ぶと頭の上で動く気配がする。

「えー、めんどい」

「いやいやいや、めんどいじゃなくてかなり危機的状况なんです
が！」

「……………っち！」

恒例の舌打ちと共にようやく頭から降りたリンカが俺の目の高さ
までやってきた。

「あー、こいつ見た目怪しいけど変な人間じゃないから」

「なっ……！」

「妖精……！？」

リンカの登場に明らかに空気の変わる謁見の間。

なんか俺が現れたときより驚かれてないか？　なに、もしかして
妖精ってこっちの世界でも珍しいの？

「ランディ、槍を下ろせ」

緊迫した雰囲気の中謁見の間の奥から凜とした声が響いた。

謁見の間にいるすべての人間の注目が声のした場所、玉座に集ま
る。

そこには豪華なガウンを纏った若い男が視線を気にもせず微笑み
ながら座っていた。

「陛下、しかし……」

名前を呼ばれた一番年上の騎士が戸惑ったように言葉を返す。

「ほかの奴らも槍を下ろせ、その妖精が言うんなら怪しい奴ではないだろ。妖精は嘘をつかねえからな」

そう言われた騎士たちはこちらを睨みながらも仕方なく槍を下ろす。

騎士たちが槍を下ろすのを確認すると玉座に座る若い男（おそらく王なのだろう）が話しかけてきた。

「それで、妖精を連れた兄さんはなんでいきなり現れたんだ？」

その質問で今度は視線が俺に集中する。

うわー、目立つの苦手なんだけどなー。緊張する。

「えーとですね、なんと言うか、ええと……」

「こいつ《ギフト》持ってるからさあ研究してるところで調べてくれない？」

まごつく俺を置いてあっさり説明してしまうリンカ。出来る妖精は違いますね。口は悪いけど。

「なるほど《ギフト》持ちか、……ランディ、確か少し前に妖精の森の方角から強い魔力の揺れを感じ取っていたな」

「はっ、宮廷魔術師が確認しております」

「それか、ということはここに転移してきたのも《ギフト》の力か？」

「いや、それは妖精の森のニアさんが……」

「妖精の森のニア？ ニア、ニアねえ……もしかして＞妖精の女王＜ティターニアのことか？」

妖精の女王？

「あーそれぞれ」

マジで！？ なんかあっさりとリンカが認めたけど女王なのニアさん！？

「ニアさんって女王だったの？」

「ん？ 言ってたでしょ妖精の代表だって」

いや、確かに言ってたけど代表と女王じゃ受ける印象がまるで違うんだが。

「まあ、女王とかは人間が勝手に呼んでるだけで妖精に王とかはいないんだけどねえ」

「ふむ、ティターニアならここへの直接転移も不可能ではないか」

「陛下、この者の言葉を信じるのですか？」

「ランディ、言っただろう。妖精は嘘をつかない。仮にそっちの兄さんが嘘をついていたとしたら妖精がそれを認めるわけがない」

王の言葉を聞いてリンカに注目が集まるが、相変わらずリンカは眠そうに目を半眼に開いてボーっとしている。

まあ、少なくともリンカは嘘つかないだろうなあ。嘘つくのすrameんどいとか言いそうだし。

「《ギフト》について調べてほしいと言ったな。まあ、《ギフト》持ちは貴重だし調べるぐらいならすぐにでも出来る……と言いたいところだが」

「今は無理だ」

王の微笑んでいた顔が少し引き締まる。

「なんで？ 調べるくらいケチケチしないでやればいいのに」

「そうしたいのは山々だが少しばかり事情があつてな」

「事情……ですか？」

「ああ」

そう言うと王は不敵な笑みを消し真剣な表情になる。

「我が国はこれから戦争をしなければならなのでな」

&l t.;王&g t.;と王国の過去（前書き）

投稿しておいてなんですがこの話なくてもよかったかなあ。

<王>と王国の過去

ミレニア王国

この世界レンドブランにおいていくつかある大陸のひとつ、白の大陸にある新興国家。

大陸の南端にあるその土地はもと人の住まない未開の地であつたらしい。南には妖精が住み一度入れば二度と出てこれないと言われる>妖精の森<が広がり、東西には5000Mを超える山々が連なる、そしてほかの国と唯一つながるはずの北にはゴーストやアンデット達が住む平原、通称>死者の源泉<が人の侵入を拒んでいた。

ミレニア王国が興る以前にもこの地の肥沃な大地に魅せられ>死者の源泉<を超えようとした国が数多くあつたらしい。しかしたとえ万を超える兵士を派遣しゴーストやアンデットを蹴散らそうとしても物言わぬ死者たちはどこからともなくその姿を現し湧き出し続けた。やがて膨大な被害を出した国々はようやくこの死者の王国ともいえる場所を抜けることをあきらめた。

それから長い年月が経ち誰もが>死者の源泉<を恐れ南の大地を忘れかけていた頃一人の男が現れた。

その男の名はレイセント・ゲイボルグ。大陸の中央にある大国ロドウィッグで活躍した冒険者で>剣王<の二つ名で大陸全土に知られていた。

彼はたった一人で>死者の源泉<に入るとゴーストやアンデットを生み出し続ける>王<が存在することを突き止める。

そしてその>死者の王<に単身で挑みあっさりと討ち果たしてしまふ。

王を失った>死者の源泉ヴァルハラくはゴーストやアンデットを生み出すことができなくなり、レイセントは冒険者仲間の手を借りながら2週間ほどで死者たちをほぼ殲滅した。

これだけでもレイセントの名が歴史に残るほどの偉業だが彼の伝説はそこで終わらない。

>死者の源泉ヴァルハラくの間を払ったレイセントはそのまま南の大地に入り自分の国を造ることを宣言する。

それからレイセントは冒険者時代に貯めた膨大な金とロドウィックの王家にまで及んでいたといわれる人脈を最大限に利用し、わずか10年ほどで本当に自分の国を造って見せた。

それがミレニア王国の建国の歴史であり、生きる伝説と呼ばれる>剣王<レイセントが本物の>王<になった物語である。

なにそのおとぎ話!?

いやいやいや一人でアンデットなぎ払ってアンデットの王様も倒してさらに何も無いところから国まで作るとか。

空想の話としてもどうなの？ 出来すぎでしょ。

と思わず突っ込んでしまいたくなるようなミレニア王国の建国の歴史を話してくれたのは、この城に勤めるメイド長さん。

俺がニアさんの手によって王城の謁見の間に飛ばされ王様に会って話をした後、今は応接室のような部屋に案内されそこでお茶を飲んでる。

どうやら謁見の間ではかなり深刻な話がされていたらしく、突然現れた俺に多少の混乱はあったものの王様と俺（リンクア？）の会話もあっさりと打ち切られ部外者の俺はこうしてメイド長さんの案内で休憩中なのである。

とはいえただ座ってお茶を飲んでいるだけというのも暇なので、扉の側に無言で立っていたメイド長さんに軽い気持ちでこの国のことを聞いてみると、ミレニア王国の建国の歴史を怒涛の勢いでしゃべり始めた。

ちなみに実際にメイド長さんが話した内容は俺が考えていたものの10倍くらいは長く、細かな描写が入っていたので途中からめんどくさくなって聞くフリだけで適当に相槌を打っておいた。

建国の歴史を話し終えたメイド長さんはまた扉の側で物言わぬ彫刻になっている。なんというかさっきまでのハイテンションとのギャップが凄まじい。乗り乗りになって話をしていたときには、ぎゅるーんとかバツコーンとかじゅわじゅわじゅわなどの擬音に、身振り手振りを加えての熱演だったのでちょっと病気なんじゃないかと思ってしまうほどの変わりようだ。

そんなメイド長さんを生暖かい目で見つめっていると扉がノックされた。

メイド長さんが扉を開けるとそこには若い近衛騎士と思わしき男がいた。

「シカタ様、陛下が呼びです。もう一度謁見の間にお越しいただけますか」

「あ、はい今行きます」

「ほれ、リンカいくぞー」

俺の隣のソファで寝ていたリンカにも声をかける。
ちなみに建国の話の冒頭ですでに寝ていた

「うー、あー、ねむい。てきとーにやっというて」

「いや、俺一人じゃ話分かんないし、無理やりにでも連れてくぞー」

そう言うのと寝ているリンカをそのまま掴みあげる。

恒例の舌打ちが聞こえた気がしたが、特に抵抗もなかったのでものまま連れて行く。

しかし話ねー、確か戦争がどうのこうの言ってたしめんどくさいことになるのは確かだよなー。

なんとなくいやな予感を感じながらも、眠ったままのリンカを手を持ち俺は謁見の間へと向かった。

&l t.;王&g t.;と王国の過去（後書き）

次回は戦争についての話になる予定です。

天災の獅子

「それで、どうしたい？」

「はあ？」

謁見の間に入ると王様にいきなり聞かれた。

「あの、どうしたいっていうのは？」

「さっきも少し話したが今この国は戦争になりそうだな、正直その対策で手一杯だ。《ギフト》の本格的な調査をしてやる余裕はない」
「はあ」

「まあそんな状況だから、面倒ごとに巻き込まれたくないならとつととほかの国に行ったほうがいいぞ」

そう言う王様はニヤリと笑う。

改めて見ると王様の容姿はとも一代で国を作り上げたとは思えないほど若々しい。赤茶色の髪に蒼い瞳、不敵に笑う表情は10代だと言われても信じてしまいそうだ。

「それとも、戦争に参加してみるか？ 《ギフト》持ちが参加するなら歓迎するぞ？」

「いや、戦争とかはちよつと……」

「はっ、まあそれが普通だわなあ」

いきなり戦争とか言われてもなあ。どうせ参加したところで役に立たないだろうし。

とはいえ《ギフト》持ちというのは貴重らしいので、もしかしたら無理やり参加させられるんじゃないかと思っていたのだが、そういう心配もない。

「ま、自分の《ギフト》の事もよく分かってないような状況でわざわざ危険を冒す必要もないだろう。戦争が嫌だってんなら早くこの国を出たほうがいいぞ」

「はい、……あの出て行くのはいいんですがこの国から出て行くってなると北の国に行くってことですよね？」

「あ？ まあそうなるだろうな、というかミレニア^{うち}と国境が接している国は北のアルカイツクだから必然的にそこになるわなあ」

「えーと、それは……いいんですか？」

「なにが？」

「え、だって戦争するってことはそのアルカイツクと争うんじゃないんですか？」

戦争というのは普通国境が接している国同士がするもんじゃないんだろうか？ 地球みたいに戦闘機やらミサイルやらが発達してるなら一概には言えないんだろうけど。

あ、それともアルカイツクとは同盟でも結んでいてさらに北の国と争ってんのかな。

「あー、なんか勘違いしてるみたいだが俺らが争ってるのは国じゃないぞ」

「は？」

国じゃない？ どういうことだ？

「国じゃなくて一人の男だ」

は？ 男？

「それは……戦争なんですか？」

「まあ正確に言うとその男一人というかその男が創った組織が相手だかな」

「組織ってそんな大きな組織なんですか？ 国を挙げて相手するよ
うな」

俺がそう質問すると王様は一つため息をついて玉座に座りなおす。

「いや組織自体の大きさはそれほど大きくない。多分全員合わせても100人にも満たないだろう」

「だが危険度で言うなら一国を相手に戦争するのと変わらないだろうな」

大きな組織じゃないのに国を相手に戦争するくらいの危険度。どういうこと？

「重度災害指定犯罪者ってのは知ってるか？」

「重度災害指定ですか？」

「ああ、どこの世界でも同じだと思うがレンドブランにも当然犯罪者ってのはいる。犯罪を犯せば捕まり国ごとの法律に照らし合わせて処罰を下す……のが普通だが中には国の治安組織に捕まることな
くのうのと生きてるやつらもいるわけだ。そんな奴らには大概懸賞金がかけられて大陸全土に指名手配されるんだが、そんな中でも特に凶悪な犯罪者を重度災害指定犯罪者と呼ぶ」

「今回ミレニア^{うち}が相手するのはそんな凶悪な犯罪者の一人でな。まあ重度災害指定犯罪者てのはどういつもこいつも化け物じみてて、一度行動を起こせば天災レベルの被害を巻き起こすことからそう呼ばれているんだわ」

天災レベルってどんだけだよ。

「そんな危険な犯罪者がたくさんいるんですか？」

「いや、重度災害指定までされている犯罪者はごくわずかだ。確か今は3人しかいなかったはずだ」

「そのうちの一人がミレニア^{うち}を狙ってるって情報が入ってな、慌て備えてるってわけだ」

「はあ、……………なんかすごいすねえ」

説明を受けたもののまるで実感がわかず間の抜けた返事を返してしまう。

「……………ちなみにその重度災害指定犯罪者でしたっけ、はなんて名前なんですか？」

「名前か？ 組織の名前は〈狂い獅子〉、そして組織を作った男の名はレオン・レオナルド」

「《^{バーサーカー}狂乱の王》の《ギフト》を持つ重度災害指定犯罪者だ」

獅子の強襲（前書き）

別に自分に文才があるとは思っていなかったものの予想以上にだめだなあと思いつつアップするのでした。

獅子の強襲

「王……ですか」

「そう現在世界でも4人しか確認されていない王の《ギフト》持ちだ」

王……あれ？ 俺の《ギフト》もたしか王って付いてたはずだけ。

「名前に王って付く《ギフト》ってそんなに珍しいんですか？」

「うん？ まあ珍しいな。現在生きている王が4人、それ以前に確認されている王を入れても確か10人ぐらいしかないはずだ」

まじかあ。いやでも《後宮の王》^{ハーレム}とかどう考えても強い能力じゃないよな。

「あー、あのですね俺のギフトも王って付いてるっぽいんですよー、なんか」

「へー、王の《ギフト》持ちなのか？」

俺の告白にあっさりと返すミレニア王。

「あんまり、驚かないんですね？」

「いや、驚いてるって。しかし王ねえ、これはロドウィックが黙ってねえなー」

ロドウィック、確かミレニア王とつながりが深いとかメイド長さんが話してたな。

「ロドウィックですか？」

「ああ、大陸の中央にある国なんだけどな、あそこは《ギフト》持ちを必死になって集めてるからな」

「特に王の《ギフト》持ちともなれば強力な能力ばかり出しな。かなり強引に勧誘されるぞ」

「はあ」

勧誘か、そんなに《ギフト》ってのは貴重なのかねえ。今のところ自分の能力すら分らない上に、実際に《ギフト》が使われるところも見ることがないので実感が湧かない。

「まあ、でかい国だけあって待遇はかなり良いみたいだけどな。国に所属するってことは国の命令には従わなきゃならねえし、自由でいたいならあんまり《ギフト》のことは言わないほうがいいぞ」

安定した生活は出来そうなのは魅力的だけど、国の命令に従わなきゃいけないってのはなあ。まだこの世界について詳しくはないけど、もしロドウィックが戦争をすることにでもなれば人を殺さなければいけないかもしれない。

正直人の生き死にから遠い生活をしてきた俺にそんなことが出来るとは思えない。

それにしても《ギフト》持ちがそんな強力ならこの国は集めたりしないのだろうか。

「あの、王の《ギフト》持ちがそんなに貴重ならおうさ……じゃなくって陛下は俺のこと勧誘したりしないんですか？」

「んー、まああんまり人に強要したりするのは好きじゃないんだわ。ミレニア^{うち}に来たいっていうんなら歓迎するけどな」

「だいたい自分の国作っただって自由でいたかったらだしな」

自由でいたいから国作ったとかどんな行動力やねんと突っ込みを入れたくなる。

「さっきも言ったけど面倒ごとに巻き込まれたくないならさっさと出ていったほうがいいぞ……………ってもう遅いか」

そう言ってミレニア王は立ち上がると玉座に立てかけてあった剣を手に取り、いきなり何もない空間を斬った。

いや斬ったというのは違うかもしれない、ミレニア王の振るった剣はいつの間にか現れてたもう一本の剣によって受け止められたのだ。

受け止めた剣は唐突に現れた黒ずくめの服を着た男の手ににぎられている。

っていつの間に！ さっきまでは誰もいなかったはずだ。

「〈狂い獅子〉か？」

「……………」

「だんまりか」

「……………さすがは剣王、まさか気づかれるとはなあ」

そう呟くと黒ずくめの男は後ろに飛び距離をとる。

改めて黒ずくめの男を見ると服に比べてその容姿は正反対といえるほど派手だった。

金色に輝く髪を肩まで伸ばし、ぱっと見はどこぞの王子様といった感じだがその目は獲物を目の前にしたライオンのようにぎらついている。

ライオン……………獅子？ ………………まさかね。

「見つかったからには自己紹介をしないとなあ」

黒ずくめの男はそう言々と不敵に笑う。

「俺の名はレオン・レオナルド。世間じゃ《^{バーサーカー}狂乱の王》とも言われ
てる」

《王》としてのチカラ

《狂乱の王》 バーサーカー

王の《ギフト》を持つ重度災害指定犯罪者。

〈狂い獅子〉という組織を率いてミレニア王国を狙っている。

これが俺が今知っているレオン・レオナルドという男の情報である。

そこに情報を付け加えるなら思った以上に顔の整った美形であること、そしてその顔の中でも特に目立つギラギラと異様な輝きを魅せる瞳。

その瞳は世界のすべてを見下しながら、すべてを手に入れようと狙っているような百獣の王のそれだった。彼の組織がなぜ獅子の名を語るのか分った気がした。

「一人で来たか、たいした度胸だな」

「剣王がどんな顔をしてるのか見に來ただけなんだけどな」

「その割には、外の見張りを相当な数殺してきたようだが？」

「ッハ、ばれたか」

ミレニア王の指摘はレオンはあっさりと認める。

そう最初に現れたときには唐突な登場に驚き気づかなかったが、今なら少し離れた場所にいる俺にもはっきりと分かる。

謁見の間に広がる錆びた鉄のにおい。

それはミレニア王と対峙する獅子の男から発せられていた。

「やはり殺してきたか………ミレニアに來た理由は、まあどうでもいいか興味もないしな。
うち」

「理由はどうでもいいがミレニアにちょっかい出したんだ、樂に歸

れるとは思うなよ」

「ッハ、帰すつもりなんか元からないだろうに」

その会話が合図だったかのように謁見の間の空気が変わった。比喻でもなんでも無く空気が鉛の様に重くなる。

「……………っな!？」

初めて体験する感覚に思わず俺は膝を突いた。とてもじゃないが普通に立ってはいられない。

俺が膝を突いたことで揺れたのと明らかに普通ではない空気に気づいたのか、頭の上で寝ていたリンカがごそごと動き出した。

「うー、なに？ 寝てんだから邪魔すんな」

「いやいやリンカさんかなりヤバイ状況なんです。寝てる場合じゃないって」

「うえ？ てかなんで部屋中がこんな殺気で充満してんの？」

殺気？ ああこの空気が重くなる感じのやつが殺気？ フィクシヨンの中だけじゃないのかあ。

「うわ、なんかおっさん二人がにらみ合ってるけどあれ何やってんの？ にらめっこ？ の割にはどっちも面白い顔してないわね」

いやいやいやリンカさん、こんな殺気バンバンのにらめっこもないでしょ。

リンカの緊張感のない声が聞こえたのかレオンがこちらを向く。

「妖精？ 珍しいな。それに黒髪の男、《ギフト》持ちか？」

あれ？ 何で《ギフト》持ちってばれたんだろ。もしかして黒髪とかレンドブランじゃあんまりいないのか？

レオンは少し興味を引かれたのか俺達の方を見るとミレニア王に聞いた。

「あんたの部下？」

「違う、客だ」

ミレニア王の簡潔な返事にレオンは更に興味を引かれたのかまた獣の目で俺達を見る。

「客、客ねえ。……もしかしておまえレンドブランこっちに来たばかりか？」

部屋に充満する殺気と、レオンの強すぎる視線にほとんど身動きの取れない俺は、わずかに頭を下げうなずく。

「なるほど、《王》か」

そう言うレオンは面白そうに笑った。

「いずれ会うだろうとは思ったがこんなに早いとはな。やはり《王》は引かれあうか」

「引かれあう？」

「ああ、まあホントなら《ギフト》持ちの《王》の先輩としていろいろ説明してやりたいところだが、さすがにいまは無理か？」

いかにも楽しそうにミレニア王を見ながら言う。

「別にいいさ時間を取ろうか？ まあ、お前が帰れないのは変わら

ないがな」

「クックック、おっかねえなー」

ひとしきり笑うと真顔に戻り剣を構えるレオン。

「んじゃ、いっちょやってみますか？」

言うが早いかレオンはミレニア王に斬りかかる。

上段から打ち込まれたレオンの剣を半身でかわすと、ミレニア王は自らの剣を無造作に突き出した。剣術のことなどまったく知らない素人の俺が見てもその突きは何の工夫も無い一撃だったが、そのスピードは尋常では無い。

ゴウツという効果音が聞こえてきそうなその突きを、しかしレオンは体をひねって紙一重でよけてみせる。そしてそのまま体を回転させた勢いのまま斬りかかる。

レオンの剣をこちらにも顔に当たるすれすれでよけたミレニア王は、剣で打ち込むのかと思いきやレオンの腹を何のためらいも無く蹴った。俗にいうやくざキック。

蹴られたレオンは軽々と壁まで吹き飛んだ。

いやいや蹴りだけで10mくらい吹っ飛んだんですが。

「あいたたたー」

蹴る方もすごいが蹴られた方も大して痛くなさそうにあっさりと起き上がる。

いや、何この二人の超人っぷり。

「んー、やっぱり剣王あいてに剣だけでやり合うのはきついかな」

そう言うとレオンはあっさりと剣を手放した。

「降参か？」

「ッハ、まさか」

「もともと剣で闘うのとかあんま得意じゃないんでね。やっぱいつもどおり、能力チカラを使わしてもらおうわ」

その言葉と共にレオンからなんとも言えない違和感があふれ出す。なんだろうかこの感じ、今まで感じたことの無い嫌な感覚。予感にも似た何かが俺に危険だと告げている。

「バーサーカー《狂乱の王》レオン・レオナルドが命ずる」

「>狂え<」

その瞬間俺は意識を失った。

《王》としてのチカラ（後書き）

遅くなりましたがお氣に入り登録してくださってありがとうございます。

出会いと目覚め（前書き）

かなり短いです。すいません。

出会いと目覚め

夢を見ていた。

何故かは分からないけれど俺はそれが夢だと理解していた。

そこは見慣れた町並み。

俺が住んでいた町の高台にある公園だった。その公園から見る景色はなかなかきれいで、元の世界に居たころは景色を眺めにちよくちよく来ていた。

そんな公園に子供の泣き声が響いていた。

あたりを探すと少し離れた場所で小さな女の子が一人しゃがみこんで泣いている。

周りにはその女の子以外に人影はなく、その女の子の姿は浮いて見えた。

近づいていと女の子が顔を上げた。

透き通るような白い肌と大きな瞳が印象的な女の子は笑えばかなりの美少女だろう。だがその顔はくしゃくしゃにゆがめ、苦しそうにつぶやいた。

「たすけて……」

そう言った少女の声は本当に小さく今にも消えてしまいそうだった。

「どうしたの？」

「みんないなくなっちゃった」

「みんな、友達？」

コクンとうなずくと俺の顔をじっと見つめてくる。

「どこに行っちゃったの？」

「……………おうがきて、みんなくるっちゃった」

「おう？ ……………もしかして《王》？ 狂った？」

「みんなくるっておうについていった」

《王》って《狂乱の王》の事か？ 狂ったっていうのは《狂乱の王》がなにか能力を使ったってこと？

「みんななにもわからなくなってぜんぶこわしてる」

「壊してる？ ……………友達は、いや君たちはなに？」

俺の質問に少女は答えない。だまっただままこちらを見ている。

「おにいちゃんもおうでしょ？ たすけて」

「俺は…………《王》かも知れないけどなんの力もないよ」

「ちがうよきづいてないだけおにいちゃんのぎふとはものすごくつよいよ」

少女はそう言うのと立ち上がった。

「おにいちゃんよばれてるよ？」

「呼ばれてる？」

「うん、ようせいさんがよんでる」

泣き顔のまま無理やり笑顔を作ると少女は手を振った。

「きづいて、しんじて、じぶんのちからを」

「そしてできればわたしたちを、たすけて」

目を覚ますと目の前には突進してくる妖精の姿があった。

「うわっ、てあぶなっ！」

「ツチ、よけんな」

「よけるわ！」

「まあ、いいか目覚ましたんなら。さすがに寝たままだと死ぬよ？」
「死ぬって……うおっ」

リンカに言われてあたりを見回すとそこは戦場だった。

出会いと目覚め（後書き）

ようやく約2万文字。話も進まないし、一話をもっと長くしないとなー！。

狂った風と剣の王（前書き）

サブタイトルが思いつきません。

狂った風と剣の王

目覚めた場所は気を失ったときと同じ謁見の間。

だが謁見の間の様相は気を失う前とは激変していた。

椅子が飛び、机も飛ぶ、高そうなカーテンに後ろに飾られていた豪華な盾も。

風が吹いていた。いや吹いているというのも生易しいほどの暴風が吹き荒れている。

室内であるはずの謁見の間で小型の台風でも来たかのような荒れっぷりである。すべてが風で飛ばされてしまいそうなか中で、しかし微動だにしない二人がいる。

ミレニア王とレオンの二人。その二人だけは俺が気を失った前と同じ場所で未だに向かい合ったままでいる。

「で、これだけか？」

「ッハ、これからだろ面白くなるのは」

「まあ、仮にも王の二つ名を持つ男がこんな手品程度で終わるわけはないよな？」

「クッククク、手品ねえ」

こんな暴風の中であつても二人は余裕で話し続けている。

しかし二人の会話からじゃ俺がどれくらい気を失っていたのかはよく分からないなあ。

「そんな長くは寝てなかったわよ。2分ぐらい？」

そんな俺の心呼んだかのように頭の上に戻ったレンカが答える。

「何でこんなになってんの？」

「さあ？ たぶん《ギフト》でも使ったんでしょ」

「《狂乱の王》の能力ってどんななのかね？」

「知らない、興味もない」

ばっさり。いや会話、キャッチボールですよ。

「まあ、この風にかんしては精霊ね」

「精霊？」

「こそ、まあ細かい説明はめんどいから省くけど、なんかこう精霊っていうやつがいて、風とか火とか光とかまあ自然の力を司ってて、ぐわーってすごい力もってるんだけどー」

「いや、ぐわーって説明下手か」

「うっさい、でもここの精霊たちは狂ってるわね」

「狂ってる？」

「こそ、精霊は理由もなくこんな風に暴れたりはしないから。たぶんレオンの能力で狂わされてるわね」

「狂わせるのがレオンの能力ってことか……」

「たぶんね」

だから《狂乱の王》か。

俺とリンカが話している間も暴風の中二人のにらみ合いは続いていた。

「さって、簡単な手品も見てもらったことだしそろそろ次の出し物に行こうか」

そう言うとレオンがミレニア王に向かって駆け出す。吹き荒れる風を物ともせず一気に間合いを詰める。

迎え撃つミレニア王も構えるもなく剣を持っていたが、近づいてきたレオンにまた無造作に剣を突き出す。突き出された剣はしかしレオンの頬ぎりぎりを掠めてはずれぬ。

レオンはスピードを緩めることなくミレニア王の懐に入り込むと顎を狙ったアッパーを放つ。

ミレニア王はこれを上体をそらし紙一重でかわすとそのままバツク転して距離をとる。そして追いつがるレオンに向けて剣を振り下ろす。

振り下ろした剣はしかしまたもレオンの体を捕らえることなくぎりぎりではずれぬ。

ミレニア王に肉薄したレオンは左のフック。かがんでかわしたミレニア王を更にヒザ。さすがに避けきれず腕で受けるがダメージを殺しきれず体が後ろに飛ばされる。

「今度の出し物は楽しんでもらえてるかね」と

「ふん、まあまあだな」

飛ばされたミレニア王だが堪えた様子も見せず立ち上がり構えるでもなく立つと手に持った剣を軽く振るい首をかしげた。

「しかし、当たらないな」

「ツハ、剣の扱いがなってねえな」

「これでも剣王とよばれてるんだがな」

「さすがの剣王もたまには手元が狂うか？」

レオンは皮肉げな笑みを浮かべる。

「……なるほど、これも《ギフト》のチカラか」
「さあ、どうだろうね」

レオンは笑みを深めると、さきほどよりも更にスピードを上げてミレニア王と戦闘を繰り広げる。

ハイスピードで展開される戦闘はレオンが押しているように見える。レオンの攻撃をミレニア王が避けあるいは防ぎながら直撃はさけているものの、ミレニア王の剣はレオンに当たりそうで当たらない。

レオンは特に避ける動きも見せないのだが剣はレオンのぎりぎりをはずれていく。

「めんどうだな」

ミレニア王は距離をとるとそうつぶやいてため息をひとつ。

「さすがに《王》の《ギフト》持ち相手じゃ楽はできないか」

「まだ出し物は全部終わってないけど？」

「そうか、ならもう少しだけ本気でやるか」

狂った風と剣の王（後書き）

中途半端ですいません。

魔を斬る剣（前書き）

話が進まない……………。

魔を斬る剣

ミレニア王は剣を肩に当てながらトントンと叩く。

「さっき剣の扱いがなってないって言っただろう？」

唐突なミレニア王の質問にレオンは訝しげな表情を浮かべる。

「ああ、言ったけどそれが？」

「あれな、あながち間違っちゃいないんだわ。俺は一応剣王なんて呼ばれちゃいるが別に剣の扱いが優れてるわけじゃない」

肩に置いていた剣を下に降ろすと構えもせず自然体で立っている。

「正式な剣術を学んだこともないから、達人と呼ばれる人間からみれば俺の剣の使い方はなっちゃいないんだろう」

確かに今までの戦いでミレニア王が見せた剣の扱いは、素人の俺が見ても洗練されているとは言いがたかった。

「あんた剣王だろ。誰よりも剣をうまく使えるから剣王なんじゃないのか？」

「いや違うな。大体剣王なんて大層な名前も他人が付けたもんだしな」

「剣の扱いがうまいわけじゃない。じゃあ何で俺が剣王なんて呼ばれているかっていうのだ……」

そこで言葉をきるとミレニア王は下に降ろした剣を少しだけ持ち

上げる。

「こんなことができるからなんだわ」

そう言うのと剣先を軽く振り下ろす。振り下ろした剣先は軽く地面に触れたかと思うと地面に刺さる。

「なっ！」

思わず声を出してしまったがそれは異様な光景だった。

ミレニア王が軽く振り下ろしたようにしか見えなかった剣は、謁見の間のおそらく大理石かなにかで出来た床に何の抵抗もなく刺さった。

「その剣は魔剣かなにかなのか？」

魔剣。確かにファンタジーの世界なら石や鉄をバターののように切り裂く剣というのものもあるのかもしれない。

だがそんなレオンの考えをミレニア王はあっさり否定する。

「いや、これはただの儀礼用の剣だ。飾りばかり豪華で剣としての切れ味は悪いな」

そんな剣でどうやって大理石の床を切ったのか。どんな疑問が出るのは当然だがその疑問にミレニア王はあっさりと答えた。

「まあ、どうやったかと言うと簡単だ。俺が斬った」

「……答えになっていないと思うが」

「そのままなんだがな。……説明するのは難しいが最初に気づいたのは6歳位だったかな、初めて剣を手にして振ったときだ。音がし

た」

「……音？」

「そう音だ。剣を振って空気を切り裂く音とは違う、何か別の物を切った音。なぜか俺はその時漠然と理解していた。この世界には空気が以外にも何か別の物が存在していてそれを斬ったんだろうってな」
「……………そうか、魔力」

レオンはそう言うところか呆れたような目でミレニア王を見る。

「そう、魔力だ。空気と同じようにこの世界に充滿しているすべての素。この世界のすべてを構成して維持していくのに必要不可欠のものだな」

「……………それを切れると」

「ああ」

「とんでもないな、化け物め」

「お互い様だろ」

ミレニア王は軽く笑うと床から剣を抜いた。

「さて説明は終わりにしてさっきの続きを始めるか？」

そう言うのと初めて自分から仕掛けに行く。

ミレニア王が振り下ろした剣を始めてレオンがバックステップしてかわす。

「おいおい、逃げるなよ」

「ツハ、《ギフト》ごと斬るとかとんでもねえな」

《ギフト》の能力を無効化されたレオンだが、その顔から笑みは消えず余裕の雰囲気もそのままだった。

「で、俺はやる気を出したんだがそっちは？」

「クックック、《ギフト》も使ってるが本気じゃないと？」

「《王》の《ギフト》がその程度で終わりな分けないだろ」

ミレニア王の言葉を受けたレオンの目が細くなる。

「本気……ねえ」

レオンからの殺気がはっきりと増大するのが分かる。謁見の間を埋め尽くしたその殺気に俺は息をするのさえきつく感じる。

「遊ぶだけのつもりだったがしょうがないか」

「《狂乱の王》が命ずる風よ荒れ狂え」

レオンの発した命令に風が震えた。

魔を斬る剣（後書き）

どう進めればいいのかやら。

主人公空気ですねー。

リンカ？だれそれ？

お気に入り登録ありがとうございます。

精霊と《王》のチカラ（前書き）

われながらサブタイトルのセンスが無い。

ちょこつとだけ血が出るので念のため残酷な描写ありにしました。

精霊と《王》のチカラ

今まで吹き荒れていた風はレオンの言葉を受けて爆発した。

そうそれは文字通り爆発だった。ミレニア王はもちろんこの現象を起こしたはずのレオンすら巻き込んですべてが吹き飛ぶ。

当然俺も吹き飛びそうになるのだが、爆発した場所からは少し離れた場所にいたことと近くの柱にしがみついたので何とか飛ばされずにいる。

「うおっ！なにが——」

「うわー、これはさらに精霊に対する《ギフト》の干渉を強めたっぽいわ」

俺の頭にしがみついたリンクが説明するがその声も風でかき消されてかすかにしか聞こえない。

「——たすけて」

唐突に頭の中で声が響いた。

「——たすけて、おにいちちゃん」

この声は、夢で会った女の子？

「——たすけて、おにいちちゃんみんなを、わたしをとめて！」

とめる？ 何を？ ……もしかしてこの風？ いや精霊か？

「リンカ！」

「なによ？」

「精霊ってしゃべれるの？」

「精霊？ 精霊自体はよっぽど高位の精霊でもない限り意識は無いし、精霊に精通した精霊術師でも話せるってのは聞いたことないわね」

しゃべらない？ ならこの声はなんなんだ。

「————たすけて」

「君は誰？ 精霊じゃないの？」

「————わたしはわたしたちはかぜ。それいじょうでもそれいかでもない。でもにんげんはわたしのことをしるふいどってよぶ」

シルフィード？ なんか聞いたことあるような。たしかファンタジー作品に出てくる精霊の名前でそんなのなかったっけ？

「リンカ！ シルフィードって知ってる？」

「シルフィード？ ……………ああ、たしか風の上位精霊がそんな名前だったかなあ」

「やっぱ精霊か！」

精霊って分かったのはいいが、助けるってどうすりゃいいんだ？
俺が戸惑っている間も風はやむことなく荒れ狂っている。吹き飛ばされた二人も何とか立ち上がるがさすがに自由には動けずにいる。

「ツハ、すげーなあ、風の精霊を狂わただけでこれか。……もしかして上位の精霊でも紛れ込んでたか？」

レオンも気づいてなかったのか。

レオンとミレニア王の間ちょうど真ん中辺りでさらに風が渦巻くのが分かる。

これは、ちょっとまずいんじゃないのか。これ以上精霊の暴走がひどくなるようだとこの部屋ごと吹き飛びそうだ。

「ハッハッハッハッハ、すげーなこれはテンション上がるわ。いけもつと狂え！」

レオンの言葉に更に風の勢いが増す。

やばい、息がするのも難しくなってきた。

どうする、どうすれば止められる？ あの子は俺なら止められると言ってたが、《ギフト》の使い方なんてぜんぜん分かんないぞ。

「止まれ！」

やけくそで叫んでみると一瞬だけ周りの風が緩んだ気がした。もしかして、いける？

「止まれ！止まれ！止まれ！」

先ほどより明らかに俺の周りの風が止む。しかしそれだけ叫んでもすぐに風が吹き始める。

だめか、もっと風を中心に行かないと。

俺の目にはレオンとミレニア王の間、目で確認できるほど渦巻く風が飛び込んでくる。

「あそこか！」

俺は叫びながら風を中心にに向けて駆け出す。

「生まれ！生まれ！生まれ！生まれ！生まれ！――」

どれだけ叫んでも風を中心に向かうほど吹き荒れる風は強くなり、俺の体を押しだそうとする。

更に凶悪な風が刃になって俺の体を切り裂く。

「つが！——くっそ、止まれ！止まれ！止まれ！」

体中が悲鳴を上げている。風で斬られた場所から血が流れ出す。

「止まれ！止まれ！止まれ！――」

それでも一歩ずつ何とか進みようやく風の中心が目の前に迫った。

「生まれ！生まれ！生まれ！生まれ！――」

風に向かって叫ぶがさすがに今までのようにはいかず風がやむ気配は無い。

もう無理かと思ったその時、風を中心に女の子の姿が浮かんた。それはもしかしたら幻だったのかもしれないが、その姿は夢で見た女の子そのままの女の子はこちらを向いて泣いている。

「たすけて」

その姿を見た瞬間俺の中でなにかがあふれた。

「止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ、シルフィード！止まれー！止まれー！」

その瞬間すべてが停止した。
そして俺も全身の痛みが限界に達して意識を失った。

精霊と《王》のチカラ（後書き）

英輝、気失ってばっかだなあ。

英輝はスキル【失神】を手に入れた。

PV10000、ユニーク20000越えありがとうございます。

いたずら風精霊（前書き）

サブタイトルがどんどんテキトーになっていく。

いたずら風精霊

また夢を見ている。

前回と同じ公園で同じ場所に少女がいた。

ただ前回と違うのは少女――シルフィードは泣いていない。

「あれ？　もしかして助かった？」

「うん、みんな元に戻ったよ」

「あー、そうなんだなんかよく分かんないけどよかったなー」

なんとなく目の前にいるシルフィードの頭をなでる。

目を細めて笑うシルフィードはやっぱり想像通り、いや想像以上に可愛らしかった。

「ありがとう、お兄ちゃんのおかげだよ」

「いや、俺もなんで止まったのかもよく分かんないしなあ」

「――ってかさ、なんかしゃべり方変わってない？」

前回の夢で会ったときはもっと舌足らずなしゃべり方だった気がする。それによく見たら身長も少し伸びてないか？　幼稚園児が小学校低学年ぐらいになった感じ。

「前に会ったときはわたしも《狂乱の王》のギフトでほとんど自我を失いかけてたから」

「ふーん、じゃあ見た目が変わったのもそのせい？」

「そう、チカラが戻ったから少し背が伸びて見えるでしょ？」

そう言うとシルフィードは少し間をおいていたずらっぽく笑う。

「でもねお兄ちゃん、精霊は見る人によってその姿かたちを変えるんだ。だからね精霊の姿はその人の願望とか内面が色濃く現れるんだよ?」

「……………えーとそれは、俺の中でシルフィードが小さな少女の姿である事を望んでいたってこと?」

「そうかもね!」

いやいやいやいや、違うから違うから確かに頭なでたとき可愛らしいなあと思っただけでも小さい女の子が大好きなロリコンさんとかじゃないから小さい女の子にお兄ちゃんとか呼ばれたい願望も無いからどっちかって言うとお胸の大きなお姉さんが好きですからつるぺたとか興味ないですから。

って誰に対して言い訳してるんだろうか、俺は。

「ふふふ、嘘だよ。内面が反映されるっていうのは本当だけどお兄ちゃんの場合は願望とかじゃないから」

「へ、願望じゃないってことは他になにが?」

「ひ・み・つ。たぶんそのうち分かるよ」

そう言われてもなんとなく釈然としないものがあるのだが。まあロリコン疑惑が晴れただけでもいいか。

「それでお兄ちゃんはこれからどうするの?」

「これからかあ、とりあえず自分の《ギフト》のことを知りたいんだけど」

「じゃあ、改めて王様に頼んだら? たぶんもう大丈夫だと思うよ」

「大丈夫ってレオンは?」

「なんかあっさり逃げちゃったみたい」

逃げたってあのミレニア王がそんな簡単に逃がしたのか？

「あ、お兄ちゃんまた妖精さんが呼んでるよ」

またとび蹴りで起こそうとしてるのだろうか。

もう少し普通の目覚ましを覚えてほしいのだが。

「じゃあ、お兄ちゃんまたね」

シルフィードの言葉を合図にしたように景色が変わる。

次に目の前に現れたのは予想通り突っ込んでくる二人の妖精だった。

……………ん、二人？

いたずら風精霊（後書き）

英輝はロリコンではありません。
ストライクゾーンが広いだけです。

ふたりの妖精（前書き）

なかなか思うように進みません。

ふたりの妖精

二人の妖精に氣をとられた俺は見事にリンカのとび蹴りをこめかみにくらしい5分間ほど悶絶した。

「……………あのー、リンカさん」

「あん？」

「もうちょつと静かに起こしてもらえるとありがたいんですが」
「めんどい」

いや、とび蹴りで起こすほうが面倒だと思うんだが。
まあリンカはいつものことだからいいとして、問題はリンカの後ろに隠れるようにいるもう一人の妖精の方だが。

「で？ そちらの妖精さんは、リンカの知り合い？」

「知らない妖精^{ひと}」

「知らないって思いつきりリンカの陰に隠れてしがみついてるみたいだけど……………」

「なんかいきなり出てきてしがみついてきた」

見知らぬ妖精さんはリンカの陰に隠れてこちらをちらちら見ながらびくついている。

なんか小動物みたいだなあ。

「おう、起きたかー」

妖精さんを観察していると後ろから声をかけられた。
振り返るとミレニア王がこちらに近づいてくるところだった。

「お、なんだランコも出てきたのか」

「ランコ？ この妖精さんランコって言うんですか？」

「ああ、元々王城^{（こゝろ）}ができる前から住んでる妖精でな、普段は奥に籠^{（かご）}っていてなかなか出てこないんだが同族に惹かれて出てきたか？」

名前を呼ばれた妖精さん——ランコは相変わらずリンカの陰に隠れたまま頭だけを出してこちらを見ている。

「あー、とこんにちは」

「……………」

「えーっと、こんにちは？」

「……………」

明らかに俺の方を見ていると思うのだが話しかけても何の反応も無い。

「っていい加減鬱陶しい！」

唐突に壁にされていたリンカが切れた。

ランコを振り切ると俺の頭の上まで飛んでくる。

リンカという壁が無くなったランコは隠れる場所を探しておろおろしている。

しばらくおろおろすると何を血迷ったのかこちらに突っ込んできた。

「うおっ！」

以外にも素早い動きでのタックルをもらに鳩尾にくらう。

予想外の攻撃にまたもや5分ほど悶絶した後何とか起き上がり、心配そうにこちらを見ていたランコと目が合う。

「あ、あの大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫大丈夫」

ほんとはまだじんじん痛むのだが、さすがに申し訳なさそうになだれる本人を目の前にしては言いづらい。

「それでランコ、どうして出てきたんだ？」

ミレニア王の質問にランコは何故か今度は俺の服にしがみつかながら答える。

「この部屋からすごい魔力と精霊のチカラを感じたので様子を見に来たんです」

「ああさっきのか確かにあれはすごかったな」

あっけらかんとそう言うミレニア王だが、未だに謁見の間の中は風で吹き飛ばされた物が転がり、カーテンは破れ絨毯もめくれあがっている。

元に戻すのはかなり大変そうだけど。

「まあ、その精霊の暴走も英輝が止めたしな」

「あのー、やっぱり精霊って俺が止めたんですかね？」

「そりゃ、誰がどう見たってお前の言葉に反応してただろ」

「いやでも何で止められたんですかね？ まったく心当たりがないんですけど」

「そりゃ《ギフト》のチカラだろ、まあまだ調べてみないとどんなチカラかはわからんがな。——ああ、そうだ《ギフト》調べたいんだろ？」

「それは————でもできないんじゃないんですか？」

レオンから狙われてるから調べられないんじゃないかなかったっけ？

「まあさっきまではレオンの目的が分からなかったからな、でもさっきやりあってみてなんとなく分かった。多分もう来ないだろう」

「目的？ 分かったんですか？」

「まあ、まだ確証はないから言えないが、たぶんな」

なんだかよく分からないがミレニア王の中ではもうレオン達が襲ってくることはない、ほぼ確信しているらしい。

「……なんかよく分かりませんが調べてもらえるならお願いします」
「そうか、じゃあさっき居た部屋まで戻って待ってろ。うちの専門家を呼んで行かせる」

「はい」

ミレニア王は俺の返事を聞くと謁見の間の奥に戻っていった。

ミレニア王が下がるのを見送った後俺たちも元の部屋に戻るために謁見の間を出て行く。

「んじゃ、戻るか」

「はいはい」

「はっはい」

俺のリンカへの言葉に返事が二つ。

頭の上と頭の下から。

……………って付いてくるのかランコ？

ふたりの妖精（後書き）

思いつきで二人目の妖精が登場。
ちなみに精霊も思いつきです。

生命と加護（前書き）

渡る世間はGive&Takeってやつですね。

生命と加護

謁見の間の出口にいつの間にか待機していたメイド長さんに案内で元居た部屋へと戻った。

今日一日の間にいろいろありすぎでさすがに疲れたので、椅子に倒れるように座り込んでぐったりしていると相変わらず俺の服にしがみついているランコが話しかけてきた。

「あの、英輝さんはリンカさんと契約されているんですか？」

「契約？ なにそれ？」

「あ、あの妖精が魔力の薄い場所で生きていくために人間と契約して魔力を分けてもらうことですが？」

「ああ、それか。確か妖精の森を出るときに命を分けてもらうとか何とか、詳しいことは聞いてないけど」

「え？ あのリンカさんは契約の際に説明しなかったのですか？」

「うん、面倒だからって」

「面倒、ですか……」

ランコは信じられないものでも見るようにこちらを見つめてくる。よく分からずにボーっとしている俺に気づいたのか我に返って説明してくれた。

「あの、すいません、契約というのは本来慎重に行われるものなので驚いてしまって」

「慎重に？」

「はい、契約を行うことによって妖精は生きていくための魔力を、人間はその妖精に合わせた加護を得るのですが、一旦契約してしまうとどちらかが死ぬまで解除できませんから」

魔力？ 加護？ よく分からない単語が出てきたが、それを確認する前に――。

「えーと、解除できない？」

「あ、はい魂まで結びつける強固な契約ですので……」

「魂って……そんな重大な契約をした覚えはないんだけども契約ってそんな簡単に出来るの？」

「あ、はい契約自体は口頭での簡単なやり取りで出来ます」

口頭ってそんな簡単でいいのか？ 魂の契約なんでしょ？

「でも、妖精が人と出会う事自体稀ですから、そうそう契約にまで至らないんですけど」

やっぱり妖精に出会うのって珍しい事なのかあ。俺は今日一日で3人に出会ったけども。

まあ、契約に関しては後で頭の上の妖精ねぼすけに聞くとして、魔力は命の源ってことでいいのかな？ 確かレオンとミレニア王もなんか話ってたよなあ。

「魔力ってのが命の源ってことでいいの？」

「そうですね、妖精は自分で魔力を生み出せませんので魔力に溢れた場所に住むか、他の生き物に分けてもらわないと生きていけないんです」

「ふーん、じゃあ加護ってのはなんなの？」

「はい、あのホントは契約の前に説明することなんですけど、契約者は魔力を分け与える代わりに妖精ごとに違ったチカラが向上する様になるんです」

「チカラ？」

「与えられるチカラは妖精一人一人ぜんぜん違うものなんですけど、

たとえばわたしだったら契約者の身体能力が向上して素早く動けるようになります」

つまりゲームなどでよくあるステータスアップの補助魔法が常に掛かってるような状態って事かな？　それはすごそうだけど、俺もリンカと契約した状態にあるって事は何かしらの加護を受けてるって事だよな。

「加護でどんなチカラが与えられるかってのは、当然妖精ほんにんは分かっているんだよな？」

「そうですね基本的に妖精自身しか知りませんので、契約する際に妖精が説明してから契約するのが普通ですね」

「いやいやまったく説明とかなかったんですけど？　まあたぶん面倒くさかったんだろうなあとと思うけど。
とはいえせっかくそんな珍しい能力があるのなら、どんなものか知りたくなるのは当然だと思う。」

「おーい、リンカ？」

「……………」

「リンカさーん、起きてますかー、ちょっと聞きたいんですけどー？」

「……………うるさい」

「いや、結構重要な質問があるんだけど？」

「……………自分で考えろ」

つく、人が下手に出ていれば調子に乗りおってからに！

「おりゃ！」

頭の上で寝ているリンカを掴むと強引に引き摺り下ろした。抵抗することすら面倒なのかされるがままのリンカを目の前まで持つてくる。

「で、リンカに加護はどんなチカラなんだ？」

しゃべりたくないと言っても言うようにひとしきり「うー、うー」とうなっていたリンカだが、しばらくして観念したのかようやく答えた。

「……はぁ、【幸運】よ」

生命と加護（後書き）

説明する妖精。

しかし、細かい設定とかぜんぜん決めてないからいろいろと無理があるな！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8976r/>

異世界と妖精

2011年11月13日09時20分発行